

首都直下地震に備える「戸塚協働復興活動 2021」第 1 回 地域資源を生かす協働復興模擬訓練の試み
地域資源を再認識し、まちづくりを促進する協働復興模擬訓練

2021/10/09 市古太郎（都立大学）

1.お話しする内容

- ・「復興訓練の次の展開を考える」という本企画趣旨を受けて、地域・行政・専門家が震災復興について対話し、＜事前＞復興まちづくり計画を作成編集することの意義を考えます。地域の視点で見た場合、A.（まちづくり協議会による）木密まちづくりの系譜として、B.地域防災活動の延長として、の2つの視点から、研究室アウトリーチの事例を通して私見を述べてみたいと思います。

A：木密まちづくりの系譜継承の視点から

- A-1【豊島区東池袋】木密ジェントリフィケーションと 1986 修復型まちづくり計画の再構築
- A-2【豊島区南長崎】時限的市街地デザインワークと防災街区公園
- A-3【世田谷区太子堂】修復型事業で確保した防災ひろばを復興準備の視点で捉え直す

B：地域防災活動の延長の視点から

- B-1【八王子市絹ヶ丘一丁目】土砂災害警戒区域かつ風景資源としての開発残存斜面緑地
- B-2【八王子市上柚木】マンネリ化を回避し知的刺激を継続する防災ワークショップ

2.豊島区の事前復興まちづくり

(1)豊島区での事前復興まちづくりの展開（2009 年度～）

- ・2009 年度の上池袋地区をスタートに、2019 年度の東池袋四五地区まで、全 8 地区で「震災復興まちづくり訓練」を実施。2020, 2021 年度はコロナ禍で中断中。
- ・対象は池袋駅をぐるっと取り囲むように広がる「木造住宅密集地域」。
- ・東池袋や雑司ヶ谷など、多くの地区で「防災まちづくり」が 1980 年代中頃から取り組まれてきた経緯をもつ
- ・訓練目的：＜事前＞復興まちづくり計画（①空間計画としての復興まちづくり方針、②時限的市街地の空間イメージと運営プログラム、③地域主体のくらしとまちの営み方針を含むプラン）の作成編集。
- ・「復興方針職員 Project チーム」を設置し 4 回の訓練と並行して Project 会議をもつ。

Ref.市古太郎（2020）木造住宅密集地域を対象とした復興まちづくり訓練で創発される＜事前＞復興まちづくり計画の意義と可能性
，日本都市計画学会論文集，Vol.55, No.3, pp.910-917

(2)豊島区での震災復興まちづくり訓練の全体プログラム例（2014 年雑司ヶ谷）

- ・第 1 回(5/25)まちを歩いて被害をイメージする（まち点検，マップづくり）
- ・第 2 回(6/29)被災後の住まいや生活を確保する（復興問題トレーニング）
- ・第 3 回(9/28)復興まちづくり方針を検討する（模擬説明会 + 意見書づくり）
- ・第 4 回(11/30)復興手順と復興まちづくり計画を考えよう（復興ワールカフェ）

※第 1 回の前に「ガイダンス」として阪神復興まちづくりの学習会を開催。また第 4 回終了後の 12/14 に地域報告会開催

3.事前復興まちづくりの取組みとそのインパクト

A-1【豊島区東池袋】木密ジェントリフィケーションと1986修復型まちづくり計画の再構築

(1)市街地特性：関東大震災後の木密市街地化と戦後防災まちづくりのトップリーダー

- ・池袋駅東口から直線距離で800m、サンシャインシティの二街区先。
- ・IkeSunParkが2020/12月に開園、元は大蔵省造幣廠。
- ・1986年東池袋四・五丁目まちづくり協議会が「まちづくり計画」を策定（「防災」とは入っていない）
- ・2020年度末で、防災広場13箇所、コミュニティ住宅1棟、防災生活道路249m、建て替え助成196戸（豊島区居住環境総合整備事業評価委員会報告書、2021/3月）
- ・2012年に不燃化特区、2014年に都市再生緊急整備地域に指定、池袋駅の開発ポテンシャルを受けて、都市計画道路81号線整備と市街地再開発事業を施行（東京都の木密重点整備地区として唯一の事例）。

(2)事前復興まちづくりの取組みとそのインパクト

- ・「みち・いえ・ひろば」改善の修復型思考を継承しつつも、焼失地を中心に、土地区画整理事業と市街地再開発事業を提案、現道幅を基本とした幅員6mの防災生活道路
- ・商店街再生ゾーン：店舗が住宅に変容しつつも、日之出商店街を歩行者優先道路と位置づけ、再生していく。
- ・既存の「辻ひろば」を集約した公園・広場の整備
- ・低コストの平常時利用から非常時の「みんなのひろば」

※木密ジェントリフィケーションと修復型まちづくりの脱構築!?

A-2【豊島区南長崎】時限的市街地デザインワークと防災街区公園

(1)市街地特性：環六（山手通り）沿道市街地（cf.東中野、渋谷本町）

- ・1915年西武池袋線開業、関東大震災を経て、1924年に椎名町駅開業
- ・1930年代に耕地整理事業、アーティストが住みつき「池袋モンパルナス」とか「アトリエ村」と呼ばれる。戦後は「トキワ荘」
- ・1994年から木密まちづくり開始、阪神淡路大震災後から木密事業導入。
- ・「南長崎はらっぱ公園」、1999年から地域住民が会をつくってまちづくり提案、2010年7月にオープン。「南長崎はらっぱ公園を育てる会」、夏の花火大会では親子連れで大賑わい、地域の防災まちづくり活動で育ててきた防災公園、面積0.57ha、マンホールトイレ、ビオトープ。

(2)事前復興まちづくりの取組みとそのインパクト

- ・南長崎はらっぱ公園と時限的市街地のデザイン：近隣の救援センター（南長崎スポーツ公園）と連携しつつ、直後の避難生活空間（テント村）および、まちの復興拠点としての時限的市街地プログラム
- ・地域でアトリエ・オフィスを構える専門家／地域在住の専門家と地域組織をつなぐ。
- ・職業・専門性を自然に前面に出したカタチでの地域でのネットワークづくり

A-3【世田谷区太子堂】修復型事業で確保した防災ひろばを復興準備の視点で考える

(1)市街地特性：東池袋四・五丁目と同じく、1970年代以降の防災まちづくりの先進地区

- ・防災生活道路＋沿道不燃化建て替え（＋ファミリー向け住宅供給）＋広場整備
- ・太子堂まちづくり協議会とリーダーご夫妻（元々は自治町会リーダーではなかった）の貢献

(2)事前復興の視点からの修復型まちづくり資源の再活用

- ・整備してきた「防災ひろば」をどう活用していくか。
- ・三軒茶屋・三宿という東京山の手の人気スポットというポテンシャル。

B-1【八王子市絹ヶ丘一丁目】土砂災害警戒区域かつ風景資源としての開発残存斜面緑地

(1)市街地特性

- ・1960年代後半に多摩丘陵を造成し分譲された戸建て住宅地
- ・住宅地境界が急傾斜地上に位置し、2016年に土砂災害特別警戒区域に指定。つまり入居世帯の多くは住み始めから約30年が経過する中、土砂災害リスクと隣合わせになっていることが公に示された
- ・斜面土地被覆は緑地となっており、八王子盆地を一望できる風景資源。
- ・初期分譲入居世代（主として夫が70代）が子育て・現役リタイアを経て、地域自治活動はとても活発。

(2)事前復興まちづくりの取組みとそのインパクト

- ・2019年度に八王子市が発意し、地域協働復興訓練を実施。
- ・がけ地（土砂災害警戒区域）に正面から向き合うものに、それを可能としたのは、自治会での地域サロンや文化サークル活動といった楽しめる地域活動、防災・防犯の取り組みで培われてきた住民間の信頼関係があったからこそ。
- ・リスク・コミュニケーションが生まれ、斜面竹林の管理やがけ天端部の非建築化など、適応（Adaptation）の視点からの斜面防災のアイデア出しがなされた。

Ref.市古太郎（2021）郊外丘陵住宅地を対象とした土砂災害リスク適応型防災ワークショップに関する研究
-八王子市K地区でのケーススタディ-、地域安全学会論文集 No.39、掲載決定

B-2【八王子市上柚木】マンネリ化を回避し知的刺激を継続する防災ワークショップ

(1)市街地特性

- ・多摩ニュータウン内（最寄り駅は南大沢）／集合住宅世帯が多い。
- ・自治町会が未組織の地区もある。集合住宅管理組合が自主防災組織の主単位
- ・東日本大震災まで、地域としての防災活動は特になし

(2)東日本大震災以降の系譜

- ・3/11当日：20%の世帯で当日帰宅できない家族あり（都市防災・災害復興研究室推計値）
- ・中学校PTAが母体となり、支援物資を集め、福島へ持って行く。
- ・地域としての防災訓練を3小中学校PTAが発意
- ・青少対（青少年対策地区委員会）の取り組みとして実施へ。
- ・2011/10月：第1回上柚木地区地域防災訓練（第2回を2012/10月）
- ・2013/10月：第3回上柚木地区地域防災訓練
→（15種類の実技訓練）①初期消火訓練、②バケツリレー（児童館主催）、③車イス避難体験（社会福祉協会主催）、④無線通報訓練、⑤ロープ結索訓練、⑥煙ハウス体験、⑦AEDと包帯法、⑧防災倉庫見学、⑨簡易間仕切り体験、⑩警察車両展示、⑪はしご車展示、⑫防火衣体験、⑬D級ポンプ訓練、⑭倒壊家屋からの救助訓練、⑮起震車訓練、
- ・2014/05月：都立大とのKick Off会議

- ・2014/10月：上柚木防災グループトーク（第4回上柚木地区地域防災訓練）
- ・2015/10月：子ども防災プログラム並行型 防災グループトーク
- ・2016/10月：子ども防災プログラム並行型 防災グループトーク（サブプログラムの充実化）
- ・2017/10月：お父さん朝練 Project 並行型 防災グループトーク
- ・2018/10月：お父さん朝練 Project+ 災害時の避難所・子どもを支える場としての学校
- ・2019/10月：上柚木防災クロスロード + 重ね地形図ワークショップ
- ・2020/10月：コロナ禍でも「コーナー」でなく「ゾーン」方式でワークショップ実施
- ・2021/10月：簡易版ワークショップを実施予定（10/24）

(3) 青少年育成会が担う地域防災の取組みとそのインパクト

- ・在宅避難生活、言い換えれば「生活回復・生活継続」の視点からの事前復興まちづくり
- ・学校運営協議会制度：防災に限らず多様な地域提案学校活動
- ・多摩ニュータウンらしい隣人関係ゆえの可能性

4. 地域資源を再認識し、まちづくりを促進する協働復興模擬訓練

(1) 生活視点の「災害への不安のつぶやき」とまちの資源に基づいて、ワークショップを組み立てる。

- ・まちづくりの視点からの「資源」とは？・・・建造空間・風景・人・営み,,,
→ 国連ミレニアム生態系評価：Building, Natural, Social の3つを Capital とする評価体系
- ※<事前>復興まちづくり計画の3つの柱の一つである「地域主体のくらしとまちの営み方針」
 - ・お茶会や居場所の回復：被災地回復支援で実施される「場づくりサロン」との共通点
 - ・平時のまちの営みと通底する生活復興の課題
- ・街区公園（概ね0.25ha以上）が存在すれば空間デザインゲームを通して、①地域復興本部の空間イメージ、②発災からのシーケンス・デザイン

(2) 効果的な協働復興模擬訓練をデザインするために

- ・復興まちづくり訓練の Output と Interim Outcome, Outcome を区別したい。
- ・訓練手法は10年以上の現場実施と改善が図られており、それなりに「こなれた」手法になっている。
- ・一方で点検コース設定や生活回復カードゲームの設問文編集、時限的市街地デザインゲームにおける敷地模型作成など、企画運営支援（シンクタンクや大学研究室の力を借りる）は不可欠。

(3) 外部資源との接続のデザイン

- ・社会福祉協議会のCSWスタッフや地元NPO/NGOなど、災害時の市民ボランティア・コーディネーター主体とのネットワークづくりは今後、ますます大事なテーマ。